

挑む!

京都鉄道博物館でSLを整備

曽根 正敏さん(38)

触って嗅いで 鉄道遺産を後世に

京都鉄道博物館（京都市）にある油とすずで真つ黒な車庫が職場。今も実際に動かせる状態で「動態保存」している8両の蒸気機関車（SL）の整備を担う。5両は戦前の製造で、JR西

日本が所有する貴重な鉄道遺産だ。 「おばあちゃん、山はしんどいんか……」。貴婦人の愛称を持つ、製造から81年のC57形1号機。春に勾配のあるJR山口線を走った途端、摩擦で車軸が壊れかけた。現在の電車では起こりえないトラブルに向き合う。



京都府福知山市出身。舞鶴高専を卒業後、古い外国車の修理会社などを経て入社。約20人の仲間とともにSL整備を担っている。うち30代は8人。

12年勤めた古い外国車を修理する会社ではエンジンを組み立てた。楽しみは「ボルトの締め方一つで動きが変わる実感」。機械いじりを追究しようとして2015年にJR西日本に入社した。翌年に念願のSL整備担当となり、「どうしたらいいんや」の毎日が始まった。最近の電車のように故障の表示もアラームもない。走行中の金属音や焼けた油の臭いから不調の原因を探る。マニュアルはなく、五感が頼り。ベテランの先輩の口癖は「手で触ってみろ」。今では部品の100分の1の狂いも指でなぞれば分かるように。大規模な修理後は、再び蒸気という命が吹き込まれる。巨体が動き出す瞬間の喜びは格別だ。「匠（たけな）になってここに骨を埋めます」。自分たちの手で動かしている。そんな手応えに引き込まれている。

文・写真 安倍龍太郎

記者から

ドドド、と吐き出される煙と蒸気。SLを見ると、力が湧いてくる気がするから不思議だ。